

一般入学試験 英語(A～D日程) 講評

【出題のねらい】

すべての日程において、出題は5つの大問から構成され、問題の種類や難易度はほぼ同じです。Iは350～500語程度の長文読解の総合問題です。IIはよく使われる日常会話での最適な応答を選ぶ問題です。IIIはテーマに沿った4つの項目の説明を読み、それに関する正誤文を選択する問題で、説明文に写真が添えられています。IVは基本的な語法や慣用表現の穴埋め問題、Vは7つの単語を並べ替える整序英作文です。全体を通して、一般的なコミュニケーションで使われる英語力を総合的に判定できるよう配慮した問題になっています。

【解答状況および解説】

A日程 / Iは日本文化の流出について論じた文章の読解問題でした。全体的に正答率は高かったのですが、空所に最適な語を入れる問1の(6)では正答率が22%という、大変低いものになりました。「日本流のもてなしで接客する方法」という文脈でhospitalityを選択する問題でした。IIは口語的な会話表現を問う問題でしたが、2.の会話では誕生日プレゼントをもらった時に、「こんなこと、しなくてもよかったのに」というよく使われる会話表現が受験生にはなじみのないものだったようです。IIIは世界各地の橋についての説明文でした。一番古い橋がどれかを問う問題は、4つの橋の説明文全体から情報を集める必要があり、正答率が低かったです。IVの穴埋め問題では(7)が30%の正答率でした。hope for peaceという慣用表現を確認しておきましょう。Vの整序問題は全体的に正答率が高かったのですが、not old enough to～(～できる年齢ではない)という不定詞を使った表現を並び替える問題は誤答が多くなっていました。よく使われる構文ですので、使い慣れておくといいでしょう。

B日程 / Iは前向きな思考について解説した文章の読解問題でした。ポジティブな思考とネガティブな思考の比較や具体例が提示されており、読みやすい文章でした。問1の(3)は適切な動詞を、(5)は適切な形容詞を選択する問題でしたが、正答率はあまり高くありませんでした。(3)の選択肢は難しい語句はなかったのですが、文自体が理解できていなかったため誤答を選んでしまったようです。問5のhは、33%という低い正答率でしたが、難しい語句は使われていないので、文の内容が理解できていたら正解として選べる問題でした。IIの会話問題では会話の中で全体の状況を把握する力が問われていますが、(5)(7)で正答率が30%以下でした。IIIはロボットについての説明文でしたが、それぞれのロボットの特徴をとらえ、選択肢でどのように言い換えられているかを読み解く力が問われました。IVの穴埋め問題では、基本的な文法の知識を使って、適切な語句を選択する問題(3)(7)(9)で正答率が低い結果となりました。Vの整序問題は、慣用表現を応用できなかった(4)の並び替えて正答率が30%以下でした。

C日程 / Iはアメリカと日本の教育について論じた文章の読解問題でした。全体的に正答率が高く、読みやすい英文でしたが、5の正誤文を選択する問題のうち、gは正答率が30%以下でした。本文と同じ内容を言い換えた選択肢を読み取る力を付けましょう。IIの会話問題も全体的に正答率が高かったのですが、(6)の宝くじに当たった人に対して、“Good for you.”と相手の成功を称賛する表現を選ぶ問題で正答率が低かったです。会話の流れをつかみ、文脈の中で最も適切な表現を選ぶことを意識しましょう。IIIはギターについての説明文の読解問題でしたが、3問とも高い正答率でした。イラストをヒントにしなが、それぞれのギターの特徴を理解することができたようです。IVの穴埋め問題では、知覚動詞の構文を問う(9)の正答率が低かったです。Vの整序問題では(4)の正答率が20%以下でした。「連絡する」(be in touch with)という慣用表現に気づけなかったようです。日本語の文をよく読み、文構造を考えながら作文をする習慣をつけましょう。

D日程 / Iはコミュニケーションにおいてどのように(how)メッセージを伝えるかを説いたエッセイの読解問題でした。文字数が多く、やや難解な英文でしたが、全体的には内容把握ができていました。問1の(3)(6)は正答率が低めでしたが、前後の語句と組み合わせるとよく使われる語句を選んでしまう傾向があるようです。IIの会話問題は全体的によくできていました。(1)では問題の答えがわからないときに「気が狂いそうだ」(drive me crazy)という口語的な表現を使っていますが、正答率が低かったです。文脈の中での受け答えを推測する力を養ってほしいと思います。IIIは世界のホテルについての説明文でしたが、写真と照合させながら文章を読み解くことができたようです。IVの穴埋め問題では、語彙、語法、慣用表現など広い範囲から出題されており、高校までの英語学習がある程度身につけていることが問われました。Vの整序問題は、丁寧に語句を組み立てていけば文にすることができる、取り組みやすい問題でした。

【受験生へのアドバイス】

英検準2級から2級レベルの語彙や慣用句、さらに会話でよく使われる英語表現を勉強するとよいでしょう。長文読解は、文章全体の流れを理解したうえで解答する問題が多いので、400～500語の英語論説文を読むことに慣れておくことが重要です。会話文も同様に、さまざまな場面における会話表現だけでなく、会話の流れを把握する力が必要になります。穴埋め問題、整序英作文問題の対策としては、英検準2級で出題されるような短文の語句空所補充問題、会話文の文空所補充問題などを解き、間違った事項をノートにまとめて覚える習慣をつけるとよいでしょう。

一般入学試験 国語総合(A～D日程) 講評

【出題のねらい】

国語総合の出題は、高等学校までの学習を踏まえ、基礎的な学習事項を十分に身につけているか、筆者の主張を正しく読み取る力を十分に養っているか、の2点の到達度をはかることを目的とし、併せて高等学校の学習を起点としながら、自主的な学習の成果が反映するような出題を心掛けています。問題は小問2題構成で、入試問題としてはやや長文となる問題文を掲げ、小問はそれぞれ10問前後となっています。漢字や語句に関わる出題の他、各大問の最後には問題文の内容の正誤を問う小問を設けています。この正誤問題は問題文全体の筆者の主張を正確に理解・把握することができているかを端的に確認するための出題であります。すべての設問が問題文に展開される筆者の主張を正しく理解しているかをさまざまな観点から問う内容になっています。個々の設問を正しく回答することがまた問題文の主張を正しく理解する方向に導かれていくというフィードバックを得られる構成になっています。問題文のジャンルは「説明文」を中心に扱いますが、明治以降の文章には一部に擬古文・漢文訓読文が含まれることがあります。

【解答状況および解説】

A日程／【問題一】は「認知的不協和理論」に関する内容を「1ドルの報酬」という一世を風靡した実験を通して解説した文章からの出題です。【問題一】の各設問の正答率は安定的に高く、平均点を押し上げる結果となりました。特に問一〇の正誤問題の正答率は高く、長文の問題文を丁寧に読み、文意を正しく理解して解答していることがよくわかりました。問三は本問題文の重要なアイデアに関わる内容です。自己認知であつても内的な手掛かりが不足する場合は他者を認知するのと同じ方法で自己認知されるという内容が正解となります。

【問題二】は「科学」の「文化」における新しい動向について、さまざまな例を挙げて紹介した文章からの出題になります。問一の(2)の正答率が極めて低く、恐らくは理解語彙に含まれていないのでありましょう。こういうやや古くさい言葉は口語ではまず出会うことはありません。やはり読書経験が結果として有効ということになるかもしれません。問二は四字熟語を問う出題ですが、例年、誤答が多い設問です。ことわざや故事成語の誤解・誤記憶は本文の正しい理解を妨げるばかりでなく、日常的なコミュニケーションにおける意思の疎通の問題を引き起こし兼ねません。耳慣れないことわざ・故事成語と出会ったら、こまめに辞書に当たるなど、日頃から注意を払うと良いでしょう。

B日程／【問題一】はUNESCOの「世界遺産」に関する文章からの出題です。今日の「世界遺産」は人類の文化遺産と地球の自然遺産が一本化された概念であることを理解し、その「顕著な普遍的価値」をどのように評価するのかというその手続きを説明した文章になります。この大問はいくつかの小問の正答率に大きな差が出ています。例えば漢字を出題した「問一」では(4)の「端緒」を正解と

する問題の正答率は26%でした。また「問四」では空欄□cに当てはまる四字熟語を問う設問ですが、正答率は31%でした。基本的な語彙の問題が最終的な合否のラインを分ける結果となっています。

【問題二】は、日本における「稲作」の歴史を考察した文章からの出題です。小学校以来の日本史の学習の中で、日本における「稲作」は「水田耕作」と一体のものとして理解してきました。この文章では「考古学」の視点から、「水田」以前の稲作の不存在を証明することができないという驚くべき現状を述べています。また、水田耕作がいかに組織的な営為でなければ成立しないのかということをも具体的な数値を用いて説明しているなど、驚きに満ちた文章だったと思います。問四はこの大問の中では重要なアイデアを理解するための設問です。ツルメが「この時代」すなわち「縄文時代」に「栽培」されていた、という証拠から導かれる結論を正しく述べた選択肢が「正解」となります。大学の学問には新しい発見が従来の世界観を大きく変える可能性が秘められています。自分自身の興味関心に限定せずにさまざまな分野の文章を読んでおきましょう。驚くべき発見も実は些細な疑問から導かれていくことがよくわかります。問一〇の「口」は「正しい」と判断した受験生が多かったようですが、この設問は「人為的生態系」の成立を「水田を開墾」することで転換すると「限定」したところが「誤り」であると判断できます。本文には人類が集団の定着性が高まることで周囲に「人為的生態」が登場すると記されていることに気がつくことでしょう。

C日程／【問題一】は、誰もが知るダーウインの「進化論」が、さまざまな形で政治思想の影響を受けてきたことを記した文章からの出題です。問題文は「進化学」を巡る高度な議論を紹介しているため、扱っている素材自体の難易度が高かったため、いくつかの設問に正答率の開きが出ています。最も顕著な設問は問四です。設問は極楽鳥の雄に見られる魅力的な踊りと華美な羽の進化が「雄」の自発的な「進化」の結果ではなく、それらの形質を好む「雌」の選択によって生じた「結果」であると説明した④が正解となります。この設問の正答率は25%でした。不正解の選択肢を選んだ受験生は、問題文の説明ではなく、自分自身の「常識」で正しいと判断した選択肢を選んでしまったようです。実は国語の問題では、私たちの一般的な「常識」とは異なるアイデアが記された文章を設問として引用し、その内容の説明の当否を問う形式の問題が頻出します。本文を離れて選択肢の文章のみで判断すると「正しい」と錯覚させる「誤答」へと導く選択肢には要注意です。一つの誤答から連鎖するように前後の設問においてもダミーの選択肢が配置されることが多いため、受験生が「誤答」の連鎖に陥っていることに気がつかないような出題もされます。このような出題に誤答しない重要なポイントは、「本文」に書かれているか否かを確認する、という視点になります。

【問題二】は日本の伝統的な「内」と「外」の世界観を述べた文章からの出題です。受験生の皆さ

んには『水戸黄門』を巡るエピソードはもはやわかりにくい面があったかもしれませんが、『となりのトトロ』のエピソードで解説される内容はわかりやすいと感じたかも知れません。【問題二】の正答率は概ね高く、個々の設問に大きな変動は見られません。このことは受験生の「層」が伯仲しているということを表しています。設問1つの正誤が全体の合否に大きく影響する局面になります。その意味で最も重要な設問は問九になります。薪を拾いに出たサツキが襲われた突風を「小さなあたり」と述べる本文の内容を正しく説明した選択肢を選ぶ問題です。両者の関係を「内」と「外」、そして「人間」と「神」のそれぞれの属性とその関係性の中で説明した④が正解となります。

D 日程／【問題一】は、「時間」とはどのようなものであるかを探求した文章からの出題です。とても難しいテーマを扱っていますが、本文では「アナログ時計」「デジタル時計」というわかりやすい比喩から「もののな時間」と「こと的な時間」を理解できる文章となっています。国語の出題ではこの説明文のような二項対立の構図となる素材を扱うことが多いです。このような文章が出題された場合は、「A対B」という構図を押さえ、「A」「B」をそれぞれどのような表現に置き換えているのかを丁寧に分析する読み方がポイントになります。問四の正答率がとても低かったのですが、恐らくは問題文の「不適切なもの」を選ぶという指示を見落としてしまった受験生が多かったかも知れません。問題は「設問」の文章の中にもあるということですね。

【問題二】は「農業」を行う昆虫であるシロアリ・ハキリアリを紹介した文章からの出題です。さ

まざまな生態のアリが紹介されるため、相互に混乱しないように設問箇所の前後を丁寧に読み直して解答する必要があります。特に問七は正答率が低かったのですが、傍線部の「その投資を栄養体にまわしている」という部分の解釈が難しかったようです。この問題は「その投資」の「その」という指示語が表す指示内容と、「投資にまわす」という表現が意味する内容を本文から正しく読み取れるかを問うています。正解である①を自信をもって選ぶことができれば合格です。

【受験生へのアドバイス】

聖学院大学の国語総合の入試問題の対策は、説明文や論説文など筆者の主張を論理的にたどるような形式の文章に慣れておくことです。分野も歴史・文化・思想・経済・科学など多岐に渡りますので、さまざまな分野のトピックに関心を持つことがとても大切です。高等学校の授業で学んだ教材を起点として、関連する分野へと学びを深めていくと良いでしょう。文学史に関する細やかな知識も日頃の蓄積がとても大切になります。受験シーズン直前に「詰め込む」という方法は役に立ちません。さまざまな分野のさまざまな文章に触れ、読書を通して語彙を増やすことにも心掛けて下さい。「長文」の出題になりますので、ある程度の「速度」が求められます。日頃の読書経験が最大の「武器」になりますし、また大学進学後にも有効な「技術」となります。ある程度まとまった分量の文章から筆者の主張と自分自身の意見をはっきりと区別しながら読み取る訓練を継続して下さい。

一般入学試験 日本史B (A日程) 講評

【出題のねらい】

問題は、大問が3題、小問が35問で構成され、出題された時代区分は、古代史・中世史・近世史・近代史で、原始と現代史（戦後史）は出題されていません。出題分野は政治史・外交史・社会経済史・文化史と、幅広く出題されています。基本的な知識を中心に問われており、各時代の基本用語をまんべんなく学習できていたかどうか、重要でした。

I

小問11問で構成されており、古代史を中心に出题されました。藤原氏の権力の変遷をテーマにしなが、政治史を中心に出题されましたが、文化史や社会経済史も出題されました。特に社会経済史で問われた、古代の土地制度の正文を選択する問題は正答を導くことに苦戦した受験生が多かったようです。また、文化史では文化財の文化名をきちんと把握しているかを問う問題が出題されました。

II

近世史後期から近代史にかけての日露関係史が出題されました。小問は12問で構成されています。外交史を中心に、政治・文化・社会経済史とまんべんなく出題されています。政治史や外交史では、内閣名と政策・出来事を一致させる問題が出題されていましたが、正答率はそれほど高くありませんでした。内閣名と政策・出来事の一致は日本史近代学習の基礎となりますので、しっかりと意識して学習を進める必要があります。

III

農業や商業などの産業をテーマとして、中世史から近世史までの内容が出題されました。社会経済史を中心に、政治・外交・文化史と多岐にわたって出題されています。大問I同様、文化財と文化名の一致を求める問題が出題されましたが、大問IIIでは、この問題の正答率が最も低い結果となりました。また、正文や誤文を選択する問題が小問12問のうち、6問出題されましたので、これらの問題に対処できたかどうかが高得点の鍵となったと考えられます。

【解答状況および解説】

問題全体の正答率は52.01%でした。大問ごとにみると、大問Iが52.56%、大問IIが51.61%、大問IIIが51.90%でした。

すべての問題で出題された空欄補充問題では、正答率は61.15%、一方、正文・誤文選択問題は42.12%となっており、正文・誤文選択問題14問のうち、9問は正答率40%を切っていました。このことから、基本用語の習得は当たり前になしつつも、正文・誤文選択問題の正答率を上げることが他の受験生に差をつける力になることがわかります。正文・誤文選択問題の誤文選択肢を大きく特徴ごとに分けると、①歴史用語が誤っているもの、②内容が誤っているもの、③時期が誤っているもの、の3つに分類できます。①の歴史用語が誤っている誤文選択肢を見つかることができる受験生は多いようですが、②の内容が誤っている誤文選択肢や、③の時期が誤っている誤文選択肢を判別できる受験生は少ないようです。一問一答集などを用いた勉強法を否定することはありませんが、歴史用語を覚えるときに、例えばその用語の背景となる知識や結果につながる内容、加えて何時代の用語か、誰が政権を担っているときの出来事なのかを意識しておきましょう。

【受験生へのアドバイス】

まずは、基本的な知識を習得することに終始しましょう。日本史学習を進めていくと些末な知識が必要となる問題も出題され、受験生を惑わせることがあります。しかし、そのような問題が合否に関わる可能性は低く、本問も基本的な知識さえ身につければ、十分に合格点をとることが可能でした。時代一致や文化名の一致、政権担当者ごとの整理も重要です。まずは歴史を大きな目で眺め、どの時代に誰が活躍したのかを整理してみましょう。人物を整理してから政策とリンクさせていく方法が有効です。

また、日本史学習では、教科書を傍らに学習を進めることが重要です。入試問題を解いていると、一見些末な知識が求められているように見える問題も、教科書にその内容が触れられていることが多々あります。まずは初心に戻って、問題を解いて、解答の根拠がわからないことがあれば、教科書で確認してみましょう。おそらく、その疑問の多くを解決することができるはずです。

本問は、基本的な知識があれば対処できる問題が中心でしたが、近年、知識だけに頼らない思考力を用いた問題が増加傾向にあります。ただし、いくら思考型の問題が出題される可能性があるといえども、基本的な知識がなければ思考力を発揮することはできません。教科書をベースにしなが基本知識を身につけつつ、問題演習を通して思考力を養う努力をしていきましょう。

一般入学試験 日本史B (B日程) 講評

【出題のねらい】

問題は、大問が3題、小問が35問で構成され、出題された時代区分は、古代史・中世史・近世史・近代史で、原始と現代史（戦後史）は出題されていません。出題分野は政治史・外交史・社会経済史・文化史と、幅広く出題されています。基本的な知識を中心に問われており、各時代の基本用語をまんべんなく学習できていたかどうか、重要でした。

I

遣隋使や遣唐使をテーマに、古代史が出題されました。小問は11問で構成されています。正答率が低かった問題に、白村江の戦い後の政府の対応に関する正文を選ぶ問題がありました。水城という単語は覚えていても、水城がどこに設置されたということは把握できていなかったようです。単語だけを丸暗記するのではなく、その単語がどのようなものであるかなど、その単語に関連する知識を整理する必要があります。

II

生糸と綿糸をテーマに、中世史から近代史までが出題されました。小問は12問で構成されています。社会経済史と外交史中心に出題されましたが、受験生の多くは社会経済史を苦手としているようです。社会経済史は、正文・誤文を選択する問題として出題されることが多いので、教科書などを通じて、単語の理解を深めることが重要です。

III

朱子学などの儒学を題材とした、テーマ史が出題されました。小問は12問、中世史から近世史までの内容で構成されています。政治史や外交史、文化史などの問題がみられましたが、やはり文化史の正答率が低いようです。本問での文化史からの出題は単語を問うものが中心でありました。必ずしも文化史は単語を問う問題が中心であるとはいえませんが、文化史の学習まで手が回っていないと、基本問題まで解答できないということになってしまいます。時代・分野ともに、まんべんなく学習を進めることが合格への近道であるといえるでしょう。

【解答状況および解説】

問題全体の正答率は、37.28%でした。大問ごとにみると、大問Ⅰが41.36%、大問Ⅱが39.93%、大問Ⅲが30.90%でした。

古代史から近代史（原始と現代史〔戦後〕は除く）まで、政治史・外交史・社会経済史・文化史とまんべんなく出題されましたが、特に社会経済史と文化史の正答率が低い傾向にあったといえます。例えば文化史について述べれば、大問Ⅲでは、「義堂周信」、「桂庵玄樹」、「大学或問」、「本多利明」と単純に単語を選択する問題が出題されました。結果は「義堂周信」を選択できた受験生が41.67%、「桂庵玄樹」が37.50%、「大学或問」が33.3%、「本多利明」が20.83%となっており、A日程を含め単語を選択する問題の正答率が50%を上回っているものが多いことを考慮（最高正答率は90.51%）しても、この文化史の問題の正答率は軒並み低いことがわかります。必ずしも文化史の出題内容に細かな知識まで必要とする問題がないとは言いきれませんが、一般的に文化史からの出題は単語の選択や文化名的一致など基本的な形式のものが多いようです。教科書や資料集などを中心に、①文化名が時代ごとに整理できること、②作品名と作者名が一致できること、③作品や登場人物の文化名が一致できること、などを意識して学習を進めて下さい。

【受験生へのアドバイス】

まずは、基本的な知識を時代や分野に偏ることなく、習得する意識を持ちましょう。本大学の日本史は、全問マーク式の問題なので、漢字を正しく書ける必要はありません。正答を選択できるように繰り返し単語を選ぶトレーニングをする必要があります。

また、時代一致や文化名的一致、政権担当者ごとの整理も重要です。まずは歴史を大きな目で眺め、どの時代に誰が活躍したのかを整理してみましょう。人物を整理してから政策とリンクさせていく方法が有効です。

日本史学習などの暗記中心の科目では、インプットだけでなく、アウトプットをどれだけ行えるかが重要です。多くの受験生が単語を覚えるためにインプット中心に努力しますが、インプット作業だけでは単語が本当に自身の脳に定着したか判断ができません。アウトプットを多く実行しなければ、成績は上がりづらいのだ、ということを念頭においておくとうれいでしょう。

最後に、本問は、基本的な知識があれば対処できる問題が中心でしたが、近年、知識だけに頼らない思考力を用いた問題が増加傾向にあります。ただし、いくら思考型の問題が出題される可能性があるといえども、基本的な知識がなければ思考力を発揮することはできません。教科書をベースにしながらか基本知識を身につけつつ、問題演習を通して思考力を養う努力をしていきましょう。

一般入学試験 世界史B (A日程) 講評

【出題のねらい】

I

ウィーン体制の成立から崩壊に至るまでの過程を、19世紀のフランス史を軸に概観したリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。ウィーン体制が国際的な保守反動体制であることや、各地で発生した自由主義・国民主義的な運動について理解しているかが問われています。またそれに付随し、19世紀のイギリスで起こった自由主義的改革やイタリアの統一運動について理解しているのかも問われています。

19世紀後半の帝国主義時代に、列強がアジア・アフリカに進出したことが、1914年に第一次世界大戦が勃発した背景となりますが、こうした状況を理解するためには、ウィーン体制期における各国の動向をしっかりと把握できていることが前提となります。

II

明朝の成立から清朝の全盛期までを概観したリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。漢民族の王朝である明朝は、異民族王朝であった元朝を打倒して成立した王朝であること、また、明朝の滅亡後に中国を支配した清朝は、満州人による異民族王朝であったという点について理解しているかが問われています。

中国史を学習するうえで、北方の騎馬遊牧民と中国との関係性は非常に重要であることから、明代におけるオイラトやタタールの侵攻について問う問題を出題しました。また、理解が曖昧となりがちな明・清代の文化史についても問いました。

グローバル化が進む現代社会のなかで、隣国である中国との関係性は今後も深まっていくことが予想されます。良好な関係を築いていくためにも、中国の歴史を理解することは大切です。

III

前3000年頃に統一王朝が形成されてから、アケメネス朝ペルシアの支配下にはいった前7世紀までのエジプト史を概観したリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。エジプトは、ナイル川の定期的な氾濫がもたらす肥沃な土壌を有することから農業が盛んであり、それ故にヒクソスやアッシリアなどさまざまな勢力によって侵略されました。したがって、エジプト史を概観することで、横の歴史が理解できているのかを問うことができるので、フェニキア人やアケメネス朝ペルシアについてなど、オリエントの広範な知識を問いました。

エジプトは正統カリフ時代にイスラーム勢力の領土となると、アレクサンドリアなどを中心に経済的に繁栄し、アッバース朝の衰退後は、東西貿易の結節点としてイスラーム世界の中心的な地位を占めるまでに成長しました。

現在、中東は政治的に不安定な地域が多く、悲劇的なニュースが取りざたされることも多いですが、それらの背景を理解するうえでも、エジプト史を縦に把握することは非常に大切です。

【解答状況および解説】

問題全体の正答率は52.1%でした。大問毎に見ると、大問Iが52.5%、大問IIが48.7%、大問IIIが55.2%でした。大問IIは、受験生が苦手としがちな中国史からの出題が中心であったこと、文化史からの出題があったことが、正答率を下げた要因かもしれません。特定の地域や時代・テーマに偏ることなく学習することが重要です。

また、人物名を問う空欄補充問題の正答率が低いことも気になります。大問IIの問1を例に見ると、空欄Fでは直前に「明の武将」というヒントがあるにもかかわらず、中国ではなく朝鮮の人物である「李舜臣」・「王建」・「李成桂」を選んだ誤答が非常に多く見られました。世界史の学習において「誰が何をしたのか」という事績の整理は非常に重要であり、まずはそれぞれの人物が、どの国のどの時代に活躍したのかという点を整理していきましょう。

細かい知識の習得はもちろん重要ですが、それ以上に、教科書の太字や用語集の赤字といった、基本的な用語や知識の習得が本学では求められています。

【受験生へのアドバイス】

世界史は「縦の歴史」と「横の歴史」という2つの視点が重要となりますが、まずは「縦の歴史」の学習をしっかりと行いましょう。

例えば、イギリス革命を学習する際には「ジェームズ1世→チャールズ1世→チャールズ2世→ジェームズ2世」という国王の順番を確実にしうえて「権利の請願はチャールズ1世の時代、審査法の制定はチャールズ2世の時代」といったように、それぞれの治世期における事績を整理しましょう。これに付随して、航海法の制定がイギリス＝オランダ戦争をもたらしたことや、アン女王の時代にスペイン継承戦争が勃発したことなどが把握できると、次第に「横の歴史」も理解できるようになっていきます。

また、地理的な知識も大切です。世界史は科目の性質上、さまざまな国・地域について学習しますが、「今、地球上のどの地域の学習をしているのか」を地図的にイメージする習慣をつけましょう。教科書には「シリア方面から侵入」や「バルカン半島を南下し」など、さまざまな地理的な情報が記載されていますが、その都度、資料集などを確認し、頭のなかで民族の移動ルートなどをイメージできるようにすると、世界史の理解が深まるため、学習がはかどります。

一般入学試験 世界史B (B日程) 講評

【出題のねらい】

I

前8世紀半ばに建国された都市国家ローマが、王政から共和政を経て帝政に移行し、395年に東西に分裂していく歴史を概観したリード文を用いて、基本事項を中心に幅広く出題しました。共和政期に関しては、パトリキ（貴族）とプレブス（平民）との身分闘争の展開や、イタリア半島の統一から地中海世界を統一するまでの過程などを、また、帝政期に関しては、元首政（プリンキパトゥス）と専制君主政（ドミナトゥス）のそれぞれの時期における皇帝の事績などを中心に問いました。

現在、世界三大宗教の一つであるキリスト教は、このローマの時代に成立し、歴代のローマ皇帝に迫害されながらも信徒を拡大していきました。そして、コンスタンティヌス帝によるキリスト教の公認を経て、テオドシウス帝の時代にはローマ帝国の国教としての地位を確立しました。西洋史を学習するうえで、キリスト教の歴史は欠かせない知識となりますが、そのキリスト教が拡大していく背景を理解することは、受験世界史のためだけではなく、グローバル化が進行する社会において、教養としても大切です。

II

「冊封体制」をテーマとして、冊封体制が成立した漢代から崩壊する清代までのリード文を用いて、基本事項を中心に幅広く出題しました。東アジア史を理解するうえで、中国皇帝と周辺諸国の君主との間で結ばれる形式的な君臣関係を軸とする冊封体制の知識は必須であり、それに付随する朝貢貿易についての理解も不可欠です。リード文をしっかりと読むことで基本的な知識を身につけてください。

現在、「世界のなかの日本」という視点が重要視されており、「漢委奴国王」と刻まれている金印や、邪馬台国の卑弥呼が「親魏倭王」の称号を授かったことなど、中学校の歴史の授業で必ず習う知識も、冊封体制の一環であることがわかれば理解が深まります。我々が使用する漢字や平仮名は中国の文化の影響を受けて成立したものであり、中国文化が東アジア世界に与えた影響を理解することは、現在の国際関係を理解するうえでも必要な知識となります。

III

モンゴル帝国が解体されるなか成立したティムール朝を皮切りに、オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国といった近世イスラーム帝国についてのリード文を用いて、基本事項を幅広く問いました。各国の事績の区別を中心としながら、ムガル帝国で成立し、現在はパキスタンの国語となっている「ウルドゥー語」を問うなど、「歴史のつながり」を意識した設問も作成しました。また、イスラーム教以外の宗教に着目してもらうことを意図して、ゾロアスター教の光明神についても問いました。

現在、中東を中心とするイスラーム諸国間の関係は非常に不安定であり、その背景を理解するうえで、イスラーム史の知識は必須となります。グローバル化が進む現代社会において、イスラーム諸国間の対立は、日本の政治・経済にも大きな影響を及ぼしますので、日々のニュースなどに注目し、現在起こっている諸問題の「根幹」を見抜く歴史的視点を養ってほしいと思います。

【解答状況および解説】

問題全体の正答率は60.4%でした。大問毎に見ると、大問Iが68.6%、大問IIが61.0%、大問IIIが51.6%でした。大問IIIは受験生が苦手としがちなイスラーム史からの出題であったことが、正答率を下げた要因かもしれません。特定の地域や時代に偏ることなく学習することが重要です。

また、正誤問題の正答率の低さも気になります。正誤問題は受験生が混同しがちな知識を誤文とするのが一般的な作題の形式です。大問Iの問2を例に見ると、「都市国家ローマについて」の設問ですが、選択肢②の「ドラコンが慣習法を成文化した」はローマではなくアテネに関しての文章のため誤文となります。つまり、問題作成者は「ローマでは十二表法で慣習法の成文化」「アテネではドラコンが慣習法を成文化」という混同しがちな知識がしっかりと区別できているかを受験生に問うために②の選択肢を作成したのです。このように、正誤問題の誤文には問題作成者の「意図」が含まれていますので、今後、正誤問題に取り組む際には、正文ではなく誤文を見抜くことを意識するとよいでしょう。

【受験生へのアドバイス】

世界史は、「縦の歴史」と「横の歴史」という2つの視点が重要となりますが、まずは「縦の歴史」の学習をしっかりと行いましょう。

例えば、フランス革命を学習する際には「国民議会→立法議会→国民公会→総裁政府→統領政府」といった政権の変遷を確実にしたうえで「八月十日事件は立法議会、テルミドール9日のクーデタは国民公会」といったように、各政権の事績を整理しましょう。同じく、イギリスのブランタジネット朝を学習する際には「ヘンリ2世→リチャード1世→ジョン王→ヘンリ3世→エドワード1世→エドワード3世」という6人の国王の順番をしっかりと覚えて、マグナ＝カルタはジョン王、百年戦争の開始はエドワード3世」といったように、各王の事績を整理していくと理解が深まります。そうすると、「ジョン王はフランス王のフィリップ2世に敗れて大陸領を失った」という知識からジョン王とフィリップ2世が同時代の人物であるという「横の歴史」も少しずつ見えてきます。

一般入学試験 数A / 数I・数A (A日程) 講評

【出題のねらい】

出題範囲は「数学I」または「数学I・数学A」です。大問数は5問で、第1問～第3問は「数学I」からの出題で必須問題、第4問と第5問が選択問題になっています。第4問は「数学I」、第5問は「数学A」からの出題で、いずれか1問を試験会場で選択解答します。試験時間は60分、解答方式はすべてマークシート方式です。2021年度は、第1問が「数と式」、第2問が「図形と計量(三角比)」、第3問が「データの分析」、第4問が「集合と論理」、第5問が「整数の性質」からの出題でした。全体としての難易度は、易～標準です。

【解答状況および解説】

第1問は、小問集合形式の問題です。(1)は計算問題(展開)、(2)は循環小数×循環小数を分数で表す問題、(3)は絶対値を含む1次不等式を解く問題、(4)は2次方程式の解の配置問題です。(2)では、 $0.2\dot{3}6 = 0.2363636\cdots = \frac{13}{55}$ の計算でミスをした受験生が多かったようです。また、(4)は、2次方程式の実数解の範囲について2次関数を利用して解く問題ですが、正答率は低かったようです。

第2問は、図形と計量(三角比)からの出題です。(1)余弦定理→(2)正弦定理→(3)面積公式の順で、基本公式の理解を問う問題です。(1)の結果を(2)や(3)で使うため、(1)でミスすると大きな失点につながります。基本事項のマスターがポイントになります。

第3問は、データの分析についての問題です。「箱ひげ図」の読み取りがテーマの問題です。(1)の「ア」、「イ」は四分位偏差や四分位数についての基本問題です。「ウ」はそれを用いて度数分布表に該当する試験を選ぶ問題ですが、この問題は正答率が低かったようです。また、(2)では「箱ひげ図」から試験の点数に対して該当する人数を求める問題で、この問題も正答率が低かったようです。「データの分析」については多くの受験生が苦手とする分野なので、十分な準備をすることで、他の受験生に差をつけることが出来ると思います。

第4問は選択問題(数学I)で、集合と論理からの出題です。(1)では「同値である条件」を選択する問題、(2)は必要条件・十分条件のどれにあたるかを選ばせる問題、(3)は与えられた命題の対偶を選ばせる問題ですので、「(sかつt)の否定」ならば「rの否定」が正解になります。そのヒントが(1)に隠れていますが、正答率はかなり低いものでした。

第5問は選択問題(数学A)で、整数の性質からの出題です。1次不定方程式について、その解法を誘導形式で出題されているために、(1)、(2)の正答率は高かったようですが、(3)、(4)でミスした受験生が目立ちました。(3)、(4)は、(1)、(2)の結果を利用して解答する問題なので、もったいなかったと思います。

【受験生へのアドバイス】

入試に向けての対策ですが、まず、教科書の重要事項の確認は欠かせません。教科書傍用問題集などを利用して、各単元の確認をしてみましょう。わからない箇所や、不安な事項があれば、教科書に戻って、該当する部分をじっくり読み込んでみるのが有効です。もちろん、学校の先生などに質問することも有効な手段です。重要なことは、基本的な部分について、わからないところをそのままにしておかないことです。以上が完了したら、次に、試験対策に移りましょう。本学の試験問題には複雑な計算が要求される問題が登場します。また、計算結果が後の問題にも影響してきます。「計算力」は日々の努力なくして自分の力にすることはできません。毎日、少しでも構わないから時間制限を付けて、「展開」「因数分解」「根号を含んだ式の計算」「方程式・不等式の解法」などの計算問題をトレーニングしましょう。また、「データの分析」では計算量が多いので計算に慣れておく必要があります。問題4、問題5は選択問題になっていますが、試験会場で選択できます。「数学I」のみを学習するのではなく、「数学A」を学習することで選択の範囲が広がります。不得意な分野を作らないためにも、すべての範囲を演習することが重要です。数学Aの「場合の数」「確率」「図形の性質」「整数の性質」なども含めて、旧センター試験や共通テストの過去問、私大マーク対策用の問題集などでトレーニングをしましょう。

最後に、2021年度の問題によるシミュレーションを取り入れましょう(過去問も利用しましょう)。試験時間は60分ですが、全体を50分で解答するトレーニングをしてみましょう。残りの10分は最後の見直しに使えるように、余裕をもった解答を心掛けてください。また、過去問では、選択問題のすべてにチャレンジしておくことも忘れずに。不断の努力が必ず実を結びます。皆さんの健闘を祈ります。

一般入学試験 数A / 数I・数A (B日程) 講評

【出題のねらい】

出題範囲は「数学 I」または「数学 I・数学 A」です。大問数は 5 問で、第 1 問～第 3 問は「数学 I」からの出題で必須問題、第 4 問と第 5 問が選択問題になっています。第 4 問は「数学 I」、第 5 問は「数学 A」からの出題で、いずれか 1 問を試験会場で選択解答します。試験時間は 60 分、解答方式はすべてマークシート方式です。2021 年度は、第 1 問が「数と式」、第 2 問が「図形と計量 (三角比)」、第 3 問が「データの分析」、第 4 問が「2 次関数」、第 5 問が「図形の性質」からの出題でした。全体としての難易度は、易～標準です。

【解答状況および解説】

第 1 問は、小問集合形式の誘導問題です。(1) は計算問題 (展開)、(2) は無理数の計算で、有理化することで計算が簡略化される問題です。(3) は絶対値を含む 1 次不等式を解く問題で、場合分けがポイントになる問題ですが、場合分けをしなくてグラフを利用した受験生もいたことと思います。(4) は文字定数を含む 2 次方程式が与えられ、条件から文字定数の値を求める問題です。

第 2 問は、図形と計量 (三角比) からの出題です。(1) では四面体 (三角すい) の表面積・体積を求める問題です。頂点 A から底面の $\triangle BCD$ に垂線 AH を下ろしたとき、点 H が $\triangle BCD$ の外接円の中心であることに気づくことがポイントです。(2) は余弦定理を用いて線分の長さを求める問題、(3) は面積公式を用いて三角形の面積を求める問題です。

第 3 問は、データの分析についての問題です。(1) は平均値と範囲から未知数や分散を求める問題です。ここでは、 b が最大値であることから $b - a = 10$ を求めることがポイントになります。(2) では変換後の平均値と分散を求め、変換前後の標準偏差について関係を問う問題です。基本的な計算問題ですが、正答率は低かったようです。「データの分析」については多くの受験生が苦手とする分野なので、十分な準備をすることで、他の受験生に差をつけることが出来ると思います。

第 4 問は選択問題 (数学 I) で、2 次関数からの出題です。(1) は頂点座標と平行移動についての問題で基本問題です。(2) は与えられた範囲内で最小値をもつ条件とそのときの最小値を求める問題ですが、正答率は低かったようです。これに対し、(3) は、与えられた 2 次関数と x 軸との交点がわかるので、解答しやすい問題だったと思います。

第 5 問は選択問題 (数学 A) で、図形の性質からの出題です。前半は、チェバの定理、メネラウスの定理を利用して、線分長さの比を求める問題で、教科書等によく見かける問題です。その結果を利用して三角形の面積比を求めるのですが、ここでは、面積比を線分比に置き換えるところがポイントです。最後は、内角の二等分線と比の関係を用いる問題です。

【受験生へのアドバイス】

入試に向けての対策ですが、まず、教科書の重要事項の確認は欠かせません。教科書傍用問題集などを利用して、各単元の確認をしてみましょう。わからない箇所や、不安な事項があれば、教科書に戻って、該当する部分をじっくり読み込んでみるのが有効です。もちろん、学校の先生などに質問することも有効な手段です。重要なことは、基本的な部分について、わからないところをそのままにしておかないことです。以上が完了したら、次に、試験対策に移りましょう。本学の試験問題には複雑な計算が要求される問題が登場します。また、計算結果が後の問題にも影響してきます。「計算力」は日々の努力なくして自分の力にすることはできません。毎日、少しでも構わないから時間制限を付けて、「展開」「因数分解」「根号を含んだ式の計算」「方程式・不等式の解法」などの計算問題をトレーニングしましょう。また、「データの分析」では計算量が多いので計算に慣れておく必要があります。問題 4、問題 5 は選択問題になっていますが、試験会場で選択できます。「数学 I」のみを学習するのではなく、「数学 A」を学習することで選択の範囲が広がります。不得意な分野を作らないためにも、すべての範囲を演習することが重要です。数学 A の「場合の数」「確率」「図形の性質」「整数の性質」なども含めて、旧センター試験や共通テストの過去問、私大マーク対策用の問題集などでトレーニングしましょう。

最後に、2021 年度の問題によるシミュレーションを取り入れましょう (過去問も利用しましょう)。試験時間は 60 分ですが、全体を 50 分で解答するトレーニングをしてみましょう。残りの 10 分は最後の見直しに使えるように、余裕をもった解答を心掛けてください。また、過去問では、選択問題のすべてにチャレンジしておくことも忘れずに。不断の努力が必ず実を結びます。皆さんの健闘を祈ります。